

啄木の短歌創造過程の心理学的研究 二

— 歌稿「暇ナ時」の逐次的分析 —

大 沢 博
(岩手大学教育学部)

はじめに

本論文は、同じ題の論文の(一) (岩手大学教育学部研究年報 第三八巻) にひきつづいて、石川啄木の歌稿ノート「暇ナ時」の短歌を、逐次的に分析していこうとするものである。

研究方法は、(一)で述べたので省略する。

なお、(一)でとり上げたのは第六〇首までであるが、第七七首までの逐次的分析は、既に拙著『東海の小島の磯——啄木短歌の心理学——』(洋々社 昭五三)に発表したので、本論文では、第六一首から第七七首までについては、ここに歌を列挙するだけにとどめる。

- 61 大太殿七つ並べて君うてど深く眠れる我は目さめず
62 あなかなしかかる最後もありやとて新婚の目の我を弔ふ
63 君よ君君を殺して我死なむかく我がいひし日もありしかな
64 己が名を仄かによびて涙せし十四の春にかへるすべなし
65 憂き事の数々あるが故に今君みてかくは泣くと泣く人
66 故さとの君が垣根の忍冬の風をわすれて六年経にけり
67 (赤き青き顔さま)の鬼の中にまじる白鬼君によく肖る
68 君などか一日笑はずひそかにも思ふ事あり葉草を煮る
69 君が名を七度よべばありとある国内の鐘の一時に鳴る
70 天外に一鳥とべり辛うじて君より遁れ我は野を走す

- 71 我が母の腹に入るとき我嘗て争ひし子を今日ぞ見出でぬ
72 ただ一目見えて去りたる雪星の跡を追ふとて君が足ふむ
73 身がまへてはつたと我は睨まへぬ誰ぞ鬼面して人を赫すは
74 もろともに死なむといふを卻けぬ心やすけき一時を欲り
75 野にさそひ眠るをまちて南風に君をやかむと火の石をきる
76 東海の小島の磯の白砂に我泣きぬれて蟹と戯る
77 青草の床ゆはるかに天空の日の蝕を見て我が雲雀病む

攻撃的感情の爆発と恐怖

- 78 待てど来ず約をふまざる女皆殺すと立てるとき君は来ぬ
約束通りの時刻にやってこなかった女への怒りが、爆発しそうになったその時に、その女がやってきたということであろう。「君」と表現されているこの女は、文壇への上昇を妨げることになった貞子と思われる。
- 期待しない時にやってきて、期待している時にはなかなかやってこない、という強い不満があったのではなからうか。

- 79 (水晶の宮の如くにかすしれぬ玻璃盃をつみ爆弾を投ぐ)

「水晶の宮」とは、ロンドンの水晶宮のことと思われる。『大日本百科事典』（小学館）によれば、水晶宮は、史上最初の世界博となった一八五一年のロンドン万国博覧会の会場として、ジョゼフ・バクストン（一八〇三―一八六五）が設計した建築で、伝統的な石や煉瓦などの材料を使わず、ガラスと鉄を中心にした透明で軽快な建築であることから、このように名づけられたという。万国博終了後、ふたたび各部材に解体され、一八五四年ロンドン近郊シドナムにかなり改変されて再築されたが、一九三六年の火災で失われたという。では、なぜこのような建築物が思い出されたのであろうか。

まず、前の歌との関連からみていくと、「約をふまざる女皆殺す」というのはげしい攻撃感情が、この歌ではもっとはげしく、「爆弾を投ぐ」と表現されている。攻撃し、破壊し、粉碎し、そして心がせいでいするイメージとして、もっともびったりしたのが、沢山のガラスの器に爆弾を投げつけて粉々にする光景だったのであろう。

この日の第二首で「大盃」という語を使ったこともあって、ガラスの盃を意味する「玻璃盃」が連想され、さらに、この日の連作の中で、「北極」「ヒマラヤ」など地球上のきわだった場所が想像されていたところから、ロンドンの有名なガラスの建物、水晶宮が連想され、歌が作られていったのではないだろうか。

歌の意味は、ロンドンの水晶宮のようにガラスの盃をつみ重ねたところに、爆弾を投げつけて、それらを全く粉々にしてしまいたい心境だと解されるが、この攻撃的感情が向けられている方向は、怨霊ならびに怨霊を背後に感じさせる貞子であろう。

80 百万の屋根を一度に推しつぶす大いなる足頭上に来る

第一句「百万の」は、直前の「水晶の」の初稿の「百万の玻璃盃」からひきついだものであろう。「百万の」は例によって誇張的表現であろうが、「屋根を一度に推しつぶす大いなる足」とはなんだろうか。これは、上方から圧迫してくると感じられる、大きな怨霊のイ

メージと解される。「屋根」は水晶宮のイメージからの連想であろう。

啄木には、不安が生ずると強度の頭重感をともなう傾向があったようである。二年前、明治三十九年の「林中日記」には次のような文がある。

三月二十七日。

昨夜は、障子の紙の薄らかに白む頃枕についたので、今日は十時を過て漸く目が醒めた。頭は鍋を被つた様に重くて、総身のけだるさ綿の如く、宛然病後の心地。昼飯の出来る迄は、枕の上で醒めたでもなく眠るでもなく……（略）

一日の計は朝にあり、と云ふが、予は何らかの希望を抱いて、元氣よく臥床をはなれた事は無い。而も恁（しん）起き出るのは、何日でも世界中の朝飯が皆終つた頃である。そして毎日同じ事を考へる。これは、甚だ漠とした、然も針の様に鋭く脳をさす問題だ。そして毎日同じ様に、日が暮れる。そして又、毎晩同じ様に、世界中の人が寝静まつた頃枕につく。夢を見ぬ夜は無い。

「頭は鍋を被つた様に重くて」と、頭重感を表現しているが、それは「針の様に鋭く脳をさす問題」に起因しているようである。では、その「問題」とは何か。前日、三月二十六日の日記の中の次の文が、それを示唆しているように思われる。

「汝の眉間に新しい黒子が一つ出来て居る。嗚呼哀れなる兎よ。汝の一身には、遠からずして非常な大事件が起るぞよ。」と云はれたと仮定する。此際自分は、或は全く此予言を信じ得ぬかも知れぬ。そして口先では、何を馬鹿ナ、と云ふかも知れぬ。然し、心の底の底では、吃度（くど）或る抑へがたき不安を感じるであらう。此不安は、纏（まと）て冥冥の間に信じて居る証拠ではないか。

何故不安を感じるのであろうか？
天を仰いで考へて見よ。

幾十幾万と数知れぬ星！

(略)

彼の無限の宇宙と、

此の五尺の人間の体と。

地球の凡そ百九倍ある太陽を三十合せた程の星も、比較の上では、
径僅か五厘の一黒子よりは小さい。

眉間に出来た黒子が、一身上の大事事件の前兆だといふ事は、或は全くは信じえぬとしても、然し、自分には、それを全く否定する理由が見付からぬ。

今夜予の胸中に起つた星軍の大喧嘩は、約四時間許り続いた。――
十二時頃の夜汽車の音を聞いた時から、今、一番鶏の鳴くまで。」

啄木は、眉間の新しい黒子にもとづく予言を、非常に気にしていたのであった。私は、恐らくは易者によるこのような予言が、啄木の心中に、怨霊のたたりによる死の恐怖をひき起こしたものであらうと推定しているが、その根拠は拙著『石川啄木の秘密』(光文社昭五三)ならびに『東海の小島の磯——啄木短歌の心理学——』(洋々社 昭五三)にくわしく述べたので、ここでは省略する。

81 君に逢はず森を出でむと豹よりも大なる蜘蛛の網にかかれる

「大なる蜘蛛」は、80の歌の「大いなる足」をひきついだ表現であらう。蜘蛛は外見その他が不快なので、古来妖怪に擬せられた動物でもあり、「大なる蜘蛛」はやはり、大きな怨霊のイメージをたどえたものと考えられる。

この歌では、「豹よりも大なる蜘蛛」というように、二種類の動物の名が使われているが、啄木はこの日の連作においてすでに、「馬」、「白き水鳥」、「蛇」、「獣」、「病鳥」、「鳥」、「病犬」、「うゑし犬」、「白き鳥」、「一鳥」、「蟹」、「雲雀」というように、動物を示す名詞をいくつも使ってきた。これらはみな比喩と解しうるものである。

「豹」と「蜘蛛」については、それぞれ牝豹と女郎蜘蛛というように、情熱的で強い女と妖しい力で男をとらえてはなさない女を、連想させる動物名とってよいであらう。

ではこの歌をどのように解したらよいだろうか。私は次のように解しておきたい。牝豹のような情熱的で強い女、貞子にもう逢わないで、暗い森のような状況から脱出しようとしたが、彼女よりもつとそろしい、女郎蜘蛛のような大きな怨霊につかまってしまった、と。

82 風すこし枝に騒げり老木の櫛試みに一葉を投ぐ

前の歌で「豹」「蜘蛛」というように、動物を比喩に使ったので、今度は植物の名を使おうとしたのであらう。「老木の櫛」は作者自身の比喩で、8の歌「なほ若き我と老いたる我とゐて諍ふ声すいか」がなだめむ」における、「老いたる我」に相当するものと思われる。「風すこし枝に騒げり」とはどういうことか。この日作った、50の歌「須臾にして颶風収まり地に伏せる我ら二人は何事もなし」の「颶風」は、五月二十四日朝の怨霊のたたりの象徴とみなされうる表現である。六月十八日の日記の最後には、「無聊な一日。寝てから古雑誌など読んで、一時の時計をきいた。窓の外にイヤな風の音がきこえた。」という、無気味感を思わせる記述もある。「風すこし枝に騒げり」は、やはり怨霊恐怖のことであらう。「すこし」としたのは、「百万」「大いなる」「大なる」など誇大な表現をつづけたので、あえて反対の表現をしたのではないだろうか。

「一葉を投ぐ」とは何か。「投ぐ」は、直接的には三首前の79の「爆弾を投ぐ」からひきついだものであらうが、「イヤな風の音がきこえた。」と書いた六月十八日の作歌、12の「千本のくちの中よりくれなるの一すぢをひき海中に投ぐ」(得にける葉よ)にも、同じ語がある。「くれなるの一すぢ」が女性の意であることは、いうまでもあるまい。「一葉」は「一すぢ」と通ずるものではないだろうか。「一葉を投

ぐ」を、貞子を捨てたと解してはどうだろうか。

啄木は、「葉」と貞子との関連を裏づけられると思われる、次のような小説断片も書いていたのである。

「女が突然自分の膝に突付して、身を震はして直泣きに泣く。貴方は私を見捨てる気でせうと言つて泣く。体も服装も、平生の通りのお葉さんには違ひないが、其声がお葉さんの声でない。訝しい。が、困つた。怎したものだらうと当惑する中にも、何処か怎う快い様なところもあつて、女の背を撫でてやつた。何か言はうとすると女は急に声を張上げて泣く。(略)

夢を見てゐたのだ、と思出すと、周之助は、天井の節穴に瞳を据ゑて、覚束ない夢の筋道を胸の中で辿り出した。——お葉さんが泣いた。それはお葉さんの室であつた。(略) 自分は突然隔の襖を開けると、其所はお葉さんの室になつてゐて、自分を見るや否や、お葉さんは裁縫を投出して来て、見捨てる気だらうと泣いた。

何だ、取留もない、夢ぢやないかと自分で打消しても見たが、實際は周之助の心に問うてみて、余り取留のない事でもないのだ、何時か知ら厭な顔になつた。怎してお葉さんは那聲を出したらうと言ふ考へが、チャリと頭脳に浮んだ。平生の声ではなかつた。

然うだ、それで自分は物言はずに立つて、襖を明けるとお葉さんが裁縫をしてゐた。其室はお葉さんの室だつた。そして、見捨てる気だらうて泣いたのだ。其声が、訝しいな、怎してお葉さんの平生の声でなかつたらう。怎も訝しい。何でもよく聞いたの事のある声だつたが……

妹——死んだ妹の声だと、稍あつてから心づいた周之助は、一人で妙な顔をして眼を大きくした。死んだお佐代！ 然うだ、お佐代の声だつた。お佐代とお葉さん！ お葉さんがお佐代の声で泣くとは、夢とは謂へ不思議な話である。お佐代は去年の十月、恰度十個月前に死んだのなもの。(以下断絶) (執筆年月不詳)

「お葉」は姓からの連想で植木貞子、「お佐代」は「サ」という音が共通している亡き少女サダをモデルとし、貞子の背後に感じられるサダの怨霊への恐怖を材料にした文であろう。「葉」は貞子の象徴的表現であるという解釈は、無理ではないのである。

かくてこの歌は、怨霊がたたってきたので、その死者のイメージを抱いている「老いたる我」は、たたりを鎮めることができないのかと思つて、たたりの契機となつた植木貞子を捨てるふるまいを試みた、と解されるのである。

ドッベルゲンゲルの歌の出現

83 「工人よ何をつくるや」「重くして持つべからざる鉄槌を鍛つ」

「老木の櫛」という、「老いたる我」と解しうる語を使った歌の直後に、このような問答歌が作られたのは、「なほ若き我」と「老いたる我」という二つの「我」の分裂が、意識に上つてきたためであろう。また、この歌は28の「いづこより引ける水ぞと百日行けど大鉄管の端にいたらず」とともに、吉井勇の『鉄の管そは何処まで走れるや』工人『われも知らぬ境に』(明41・1)の影響をうけているようである。

「工人」は、もちろん歌を作っている作者自身のことであろう。「重くして持つべからざる鉄槌」とは、役に立たないものであるから、無用な歌の隠喩であろう。それを「鍛つ」というのは、無用無価値な歌を作ることであつたと思われる。

さらに、「重くして」という語に注目すれば、重くのしかかってくる怨霊に反撃している、という意味が秘められていたとも考えられる。

そこで私は、この歌の真意は、「今おまえは何を作っているのか」と自問し、「重くのしかかってくる怨霊のたたりに反撃したい気持ち

を、何の価値もない歌で表現しているのだ」と自答した、ということであつたろうと思うのである。

84 かにかくに艤装終れる船は今船渠を出でて海底に入る

「艤装」とは、航海のために船の準備をすることである。「艤装終れる船」が「船渠を出でて」、海上を進むのではなくて「海底に入る」というのであるから、非常に奇妙な歌である。いったい、どういう意味の歌なのであろうか。

まず 83 の歌との関連を考えると、「鉄槌を鍛つ」と詠んだことから、鉄槌を使う艤装作業を連想したので、現在の作歌活動を「艤装」と表現したのであろう。そうすると、「艤装終れる船」というのは、胸の中にあつた思いをすべて歌に表現しつくした自分、という意味になる。

「海底に入る」とは、これまでの探究結果と照合すれば、死の境界に入っていくことであらう。結局、この歌は死の願望の歌と考えられるのである。

85 風楼にみち人々は盃を措けどもいまだ大雨来らず

「風楼にみち」は、三首前の「風すこし」からひきついだものであらうし、その意味は、怨霊が現われる気配がこの赤心館にみちた、ということであらう。「盃」は、16 の歌「我とわが愚を罵りて大盃に満を引く群を去りえず」について述べたように、飲酒という欲望を満足させるときの道具であるので、この頃の啄木の状況からみて、性的欲望の象徴であつたと思われる。とすると、「盃を措く」というのは、性的欲望をみだすのをひかえることになる。

「大雨」は「山雨」をなおしたものであるが、何を意味しているのであろうか。「山」については私は、土葬の墓の土まじゅう、とくに沼田サダの墓の土まじゅうのイメージが背後にあるとみな

してきた。「大」は「大いなる足」とか「大なる蜘蛛」というように、大きな怨霊のイメージの表現に使われた、と考えられるものが多い。したがって「大雨」はやはり、怨霊の象徴的表現と解するのが適切と思われる。

「人々」は、複数の人間であるが、作者自身のことであろう。

以上の分析を総合すると、この歌は、無気味な気配を感じたので、少女サダの霊への裏切りとなる性的欲望の満足をはかえ、待ちかまえているけれども、まだ怨霊は現われないという意味になる。

86 我怖る昨日枯れたる大木の根にぞ見出し一寸の穴

恐怖を明瞭に表現した歌である。「枯れたる大木」というのは、七日前の日記に「Three of them を読みながら、枯れた縦の大木の上の空を眺めて、何とはなく心が暗くなつてしまつた」(明41・6・17)とあるので、部屋から見えるその縦の木のこと、その根の小さい穴から、墓穴を連想したことがあつたのかもしれない。

しかし、性的意味を含むと解された85の歌との関連を考えると、「大木の根」の「一寸の穴」は、女体のことでもあつたと思われる。女体に対する啄木の恐怖は、五月二十四日朝、推定であるが貞子との性関係の時にたたり恐怖が生じたという、これまでの私の解釈と照合すれば、十分に了解できることである。

87 無事にゐて倦むを知らざる少女子は早くも我に倦まれけるかな

仕事をもち、ひまでいることにあきもしない「少女子」とは、貞子のことであろう。自分は、そのような貞子にたちまちあきてしまった、というのであろう。

88 誰ぞ雲の上より高く名をよびて我が酣睡を破らむとする。

またもや恐怖の歌であるが、この場合には上の方から感じられる

恐怖を表現している。高いところから名をよばれるので、熟睡を妨げられるのだが、名をよぶのは誰か、というのである。幻聴体験の表現であるかもしれない。

89 我君ををかさむかくぞ嚇しにし日よりぞ君は我を怖れず
(ころさむ) (嚇れにいひし日よりぞ)

初稿は「我君ををかさむかくぞ戯れにいひし日よりぞ君は我を怖れず」である。「をかさむ」は、いったん「ころさむ」と訂正したあと、再び「をかさむ」と赤ペンで書きなおしたものである。「我君ををかさむ」という、性関係をせまることが使われているので、この「君」は貞子であろう。

したがってこの歌は、私が貞子に性関係を迫る意味のことばを発して以来、彼女は私を怖れなくなった、ということ詠んだのであろう。

90 (一陣の颶風を呼びて問安の使者をつかはす恙あらずや)

またもや「風」の歌である。「颶風」は、強烈な風もしくは熱帯地方に発生する暴風のことであるが、これまでの「風」の意味探究の経過からいって、やはり怨霊が現われそうな無気味な気配の意味を秘めたものと思われる。「問安」とは、安否を問うということである。

この歌は、巨大な力をもった怨霊の立場になってみて作った歌であらう。すなわち、強い風を呼びよせ、お前の安否を問う使者として、一しきり吹かせてやったが、無事でいるか、という意味に解される。

91 我時に天井にある節穴の目ににらまれて眠る能はず

上方恐怖、しかも「目」の恐怖の歌である。天井の節穴さえも自

分をにらむ目とみえて、怖ろしくて眠れないことがある、というのである。

92 悄然として前に行く我を見て我が影も亦うな垂れて行く
(また)

しょんぼりとして前を歩いて行く自分の姿を見ている自分の影も、やはりうなだれて歩いて行く、というのである。ドッペルゲンゲル(二重身)の歌である。

啄木はドッペルゲンゲルを体験したのであろうか。この問題については、すでに拙論「啄木の『我』の構造——『暇ナ時』の歌稿にもとづいて——」(岩手大学教育学部研究年報 第三七巻)で論じたので、ここでは省略するが、結論としては、啄木の他の作品にドッペルゲンゲルを思わせるものがみあたらないので、夢の中のドッペルゲンゲルを詠んだと解するのが妥当と思われる。

祭壇の前にともせる七燭

93 わが友はいたく煙草をたしめども銭の無き日は仮寝ぞする
(うたたね)

おそらくドッペルゲンゲルが、夢うつつの中のことだったので、「仮寝」が連想されたのであろう。「わが友」は、二重の「我」の歌につづいていることでもあり、作者自身のことと考えられる。啄木が煙草を非常にたしなんでいたことは、五日前の日記「起きたのが八時、巻煙草がない。十二時迄はその事許り考へて、立つて室の中を歩いたり、腰かけて窓をあけてみたり許りした。昼飯を喰つてから、到頭、羽織と肩かけを持つてつて質に入れ、煙草と、机(七十銭)をかつて来た。」(明41・6・19)で裏づけられる。衣類を質に入

れてさえ煙草を買うほどであった。そうするとこの歌は、いよいよ質に入れる物もなくなった時のことであらうか。

94 我未だおのが子を喰ふ牛を見ず、又見ず我を愛でぬ女を^(犬を喰へる)

二首前のドッベルゲンゲルの歌、「悄然と」と同じように、「我」という語を二回使っている歌である。「見ず」と打消しているとはいえ、「おのが子を喰ふ牛」あるいは「犬を喰へる牛」という、奇怪な牛を登場させているが、「牛」は何を意味しているのであらうか。この歌より後で作られた歌であるが、「暇ナ時」には、次のような「牛」の歌が書かれている。

炎天の下わが前を大いなる沓ただ一つ牛の如行く^(明41・6・25)
「何を見てきはをのくや」「大いなる牛流盼に我を見てゆく」

はてしなき原のもとに埋れたる黄金の牛は掘る人を待つ^(明41・6・26)
蟻の群相いましめて手つなぎに眠れる牛の臀にのぼりぬ

(以上 明41・7・16)

「炎天の」の歌は、同日の作歌「までどく／＼尽くることなき葬りの無言の列ぞわが前を過ぐ」と通ずる歌であり、大きな怨霊のイメージと思われる「大いなる沓」を、「牛の如行く」と牛にたとえている。

「『何を見て……』」の歌の「大いなる牛」は、作者がおののいてる対象である。

「はてしなき」の歌の「黄金の牛」は、作者が掘り出したい願望をいだいている、地下の死者のことと解される。

「蟻の群」からみれば、「牛」は巨大なもので、やはり大きくみえる怨霊のことと思われる。これら四首の「牛」はすべて、怨霊と解してよさそうである。

そこで、「おのが子を喰ふ(犬を喰へる)牛」も怨霊とみなしておいて、探究を進めていこう。初稿の「犬」をとり上げよう。「牛」を怨霊とみなせば、「犬」も文字通りの犬とはみなせなくなる。「暇ナ

時」には、次のような「犬」の歌があるので検討してみよう。

我つねに遠く離れて君現ふ物に怯えし病犬のごと^(やまいぬ)
うゑし犬皆来て吠えよ此処にゐて肉をあたへぬ若き女に^(犬)

(以上 明41・6・24)

我うゑである日に細き尾をふりてうゑて我見る犬の面よし
われ一人なきて走りぬ眠へる巷に犬の吠えて追ふゆゑ

(以上 明41・8・8)

「我つねに」の歌では、明らかに自分を病犬にたとえている。次の歌の「うゑし犬」は、「肉をあたへぬ若き女」に対して、作者と同じように攻撃させようとしている対象である。「我うゑて」の歌の「犬」は、「我」と同じく「うゑて」いるのであり、作者と同一視されているといつてよい。「われ一人」の歌では、「われ」が「犬」に吠えられて、追いかけられているのであるが、「我うゑて」の二首後に作られた歌なので、うえている「犬」に自分のうえている、あわれな姿を見るが故に、「なきて走」るのだと解することができよう。

このようにみえてくると、初稿の「犬を喰へる牛」というのは、作者自身を食い殺してしまう怨霊ということになり、これまでの探究結果と一致する。では、この語句を「おのが子を喰ふ牛」となおしたのは、なぜだろうか。「我未だ犬を喰へる牛を見ず」というように、その存在を主観的に打消しはしたものの、我が身が殺される怖れについての、かなり明瞭な表現なので、そのままにしておくことは受け容れがなくなり、「牛」自身の子に代えたのではなからうか。下の句の「又見ず我を愛でぬ女を」^(犬)は、上の句の「見ず」をもう一度使って、女性からきられることのない自分を顯示したものである。怨霊によって否定される自分ではあるが、女性からはきられたことのない自分であると肯定し、バランスをとったものと思われ。

95 その時に雷の様な哄笑を頭上に聞いて首をちぢめぬ

上方恐怖の歌であり、53の「相抱く時大空に雲おこり電来り中を劈く」と、基本的に同じと考えられる歌である。五月二十四日朝、おそらく貞子と抱擁中に娘重病の手紙が届くという、衝撃的体験を比喩的に詠んだものであろう。

96 一線の上に少女と若人と逢ひて百年動かむとせず

「少女」は貞子、「若人」は啄木自身で、互いに向き合って動きもせず、長い時間をすごしたことを詠んだのであろう。「一線の上に」は、一線を越えるという、性関係を意味することばからの連想によるのではなからうか。

この歌は、52の「我つねに遠く離れて君唄ふ物に怯えし病犬のごと」と同じように、貞子の背後に少女サダの怨霊を感じる啄木と、なぜか拒否的になってしまった啄木に、怨みをこめて向かい合う貞子を想像すると、よく了解できると思われる。

97 わが父は何を怒るや大いなる青磁の瓶を石上に撃つ

「わが父」が主語であるので、この歌だけ独立させて読むと、父一槓の怒りの行為を回想した歌と解釈されるのは無理もない。しかしこの日の連作歌は、これまで述べてきたように、語の背後に何かを秘めていると解されるものがほとんどである。この歌についても、それぞれの語の意味を、他の諸歌との関連で探究すべきであろう。

まず「青磁の瓶」をとり上げよう。「暇ナ時」執筆開始の日、六月十四日の日記に「夜、青磁の花瓶を夜店で買つて来て金田一君へ。」とある。この作歌の前日、六月二十三日の日記には「終日雨降であつたが、減多にない程頭の明瞭した日であつた。暮れてから一寸出で花瓶を一つ買つて来た。其あとに貞子さんが来て行つたといふ事

であつた。／百合の花の仄かに籠つた室に寝る心安さ」とある。啄木が自分の部屋においた花瓶が、青磁であつたかどうか不明であるが、金田一氏に上げた花瓶は青磁であるので、この歌の「青磁の瓶」が現在の状況に関連している可能性はあろう。

次に、「青磁の瓶」の上に「大いなる」とあることに注目したい。私は、この日の連作歌の中の「大山」、「大いなる足」、「大なる蜘蛛」は、大きくみえる怨霊のイメージと解してきたが、この解読を適用すると、「大いなる青磁の瓶」も怨霊のイメージの表現ということになる。しかも「石上に撃つ」という破壊願望の語句をつづけているし、上の方には「何に怒るや」とあるので、怨霊への怒りと怨霊抹殺の願望が秘められていたと思うのである。「石」は、この日の連作歌の第一首から使われたが、墓石の意味と解されてきた語である。

しかし、怨霊恐怖におちいつているのは、作者啄木自身であるのに、主語は「わが父」なのである。どう考えたらよいだろうか。これは、四首前の「わが友はいたく煙草をたしめども銭の無き日は仮寝ぞする」と同じように、自己を対象化して、他の人物とおきかえたものと考えてよいであらう。だが翌二十五日には、「我れ父の怒りをうけて声高く父を罵り泣ける日思ふ」と、「やや老いて父の怒らずなりし頃我れわが君を思ひそめてき」という、父の怒りの回想と思われる歌を作っているの、すでにこの歌でも、怒れる父のイメージが含まれていた可能性は否定できない。そこで「わが父」も、我であると同時に父でもあるという、二重構造の表現とも考えられるのである。

さらに例証として、啄木が一カ月前に作った詩で、作者自身を「父」としたとみなされうる、「小さき墓」の第一連と第五連をあげておこう。

彼は今帰り来りぬ、ふるさとの
古木の栗の下かげに。――

そが下に稚児ちごこそ眠れ、二十とせを
父が手向たむかへの花も見ず。

しかはあれ、汝も亦問ふな。稚児よ、ただ、
その終焉いっせの日の笑に彼を迎へよ。

「汝が父は汝を養む。」と唯一語、
つめたき碯いしに口づけて彼は呟やく。

「つめたき碯いし」の下に眠れる「稚児ちご」は、亡き少女沼田サダであ
らう。

98 日一日巷々をゆきつくし遂にも逢はず死せる我が児に

「我が児」は、前の歌の「わが父」からの連想であろう。毎日巷
を歩きまわったが、結局、死んだ我が児には逢はなかった、という
奇妙な歌である。なぜならば、この頃の啄木の子どもは娘京子一人
で、一カ月前に重病の知らせが届いたが、死んではいけないのである。
「遂にも逢はず死せる我が児に」という表現の背後には、我が児は
死ななかったという意味がこめられているのかもしれないが、それ
にしても、生きている我が児に「死せる」という語をつけたのはな
ぜだろうか。

この疑問はやはり、「我が児」に別の意味を見出すことによって
解決されるのである。すなわち、前述した詩「小さき墓」の「稚児」
のモデルと推定される少女サダである。啄木には、少女サダの面影
を抱きながら、街で彼女に似た少女を探し歩いたが、遂に見つから
なかった、という体験でもあったのではなかろうか。

以上のように、この歌は、我が児は死ななかったという意味と、
死せる少女サダの面影を求めて、巷で似た少女を探したが見つから
なかったという意味の、二重構造の歌と解することができ。

99 祭壇の前にもとせる七燭のその一燭は黒き蠟燭(一本の)

「黒き蠟燭」という表現で、無気味さを感じさせる歌である。「七
燭の」「蠟燭」、とりわけ「黒き蠟燭」とは何を意味するのであろ
うか。

この日の連作歌の中で、すでに「黒」という語が次の諸歌で使わ
れてきた。

つと来りつと去る誰ぞと問ふまなし黒き衣着る覆面の人
大版の黒き表紙の文字かかぬ千巻の書に埋れて死す(中)
ひもすがら君みず餓えし我心大熱の火に黒麵麴くろぼんをやく

「黒き衣着る覆面の人」、「大版の黒き表紙の文字かかぬ千巻の書」、
および「黒麵麴くろぼん」はいずれも、怨霊と解される語句または語である。
「黒き蠟燭」も、怨霊と解してみたらどうであろうか。

では、「七燭」の「蠟燭」の他の六燭は何だろうか。「七」は、私が
「東海」の歌について行なった解説の結果、七人の女性と一致す
る数である。

かくてこの歌は、七人の女性のイメージが自分の心の中にはつき
り浮かび上がったが、その中の一人、少女サダは怨霊でもあるのだ、
という意味を秘めた歌と私には思われるのである。

幼き日の恐怖の思い出

100 わが若き日を葬りて立てにたる碯いしを日も夜も君は抱きぬ

「碯いし」は、いうまでもなく墓石のこと、これまでの探究結果か
らいて、やはり少女サダの墓石を意味していたと推定される。

石田(前掲書)は「この歌は作者の同一視心理を転倒して、／君
若き日を葬りて立てにたる碯にくちづく我は日も夜も／として読み
なおしたほうが、理解しやすい。」と述べたが、同感である。しか

し、啄木としてはこのように表現したのであるから、この歌は、少女サダへの思慕を秘めた二重構造の歌といってよいであろう。

101 今日九月九日の夜の九時をうつ鐘を合図に何か事あれ
(我は火を焚く)

直前の作歌「わが若き」の「日」と「夜」を、ひきついで作ったと考えられる歌である。「九」という数詞を三回も繰り返して使っているが、この日の連作歌には数詞の使用が顕著である。すでに使われた数詞とその頻度を出現順にあげれば、「一」(二六回)、「千」(七回)、「億兆」(二回)、「百」(三回)、「三」(二回)、「七」(四回)、「二」(二回)、「万」(二回)、「十四」(幼き日)をなしたもので、後日の推敲かもしれない。一回、「六」(二回)、「百万」(二回)である。「九」という数詞を使ったのは、この歌が初めてである。これまでとことなる数詞を使ってみようという動機も、はたらいいたかもしれない。

「今日九月九日の夜の九時をうつ」という上の句は、直前の歌の「日」と「夜」をひきつぎながら、新しい数詞を使おうという動機がはたらい作られたものであろうが、問題は下の句の「鐘を合図に何か事あれ」である。

「鐘」の歌は、すでに二首作られている。最初のは「千年に唯一度鳴る山上の鐘のひびきにおどろきて死す」である。この「千年に」の歌については、本論文の(一)において、啄木が子ども時代に墓からの火の噴出をはじめて目撃し、非常におどろいた体験を詠んだのであろう、と述べておいた。

「今日九月」の歌の初稿の第五句は、まさに「火」が使われており、「我は火を焚く」であった。直前の歌「わが若き」の場合と同じように、啄木は自己を少女の霊と同一視していたとみなせば、この歌もやはり、少女サダの土葬の墓からの火の噴出の光景を秘めた歌と解されるのである。

しかし、啄木は「我は火を焚く」を抹消して、「何か事あれ」と

した。秘密の体験をかくしたかったのであろうか。「何か事あれ」とは、墓からの火の噴出を目撃した時のような、衝撃的で意味深い体験を求めている心境であろうか。

102 (ああその夜家内の燈ひとときに消えてわが母病みそめし夜よ)

「ああその夜」は、直前の歌の「今日九月九日の夜」をひきついで表現であろう。「燈ひとときに消え」た後は真暗闇であろうが、それは火の噴出の後の墓地の暗闇を思い出して作った表現と考えられる。「家内の燈」としたのは、表現に変化をつけるためと思われる。

しかし、「その夜」は「わが母病みそめし夜」なのである。「わが母」を文字通りに解釈すると、前述の解釈と一致しなくなる。これは、作者自身の意味でもと解した、97の「わが父」と軌を一にしていると考えれば、すなわち本来は我であると解せば、不一致ではなくなる。

この解釈を裏づけるのは、「病みそめし」という語句である。この日の連作で「病」は、29の「病おもりぬ」(我はかく病む)、52の「我つねに遠く離れて君現ふ物に怯えし病犬のごと」、77の「我が雲雀病む」というように、三回使われたが、いずれも作者自身の怨霊恐怖の表現と解されるものばかりである。「わが母」を我とおきかえて解釈すれば、この「病みそめし」は、少女サダの墓からの火の噴出の光景を見た直後、墓地が真暗闇になり、その時怨霊恐怖がはじめて生じたという意味になり、これまでの探究結果とびつたり整合するのである。

この歌全体を抹消したのは、やはり秘密の体験をかくしておきたくなったからではなからうか。

103 (喪服着し女はとへど物いはず火中に投げぬ血紅の薔薇)

またもや「火」を使った歌である。火を噴く墓のイメージがつづ

いていたのであろう。「喪服着し女」とは誰のことだろうか。喪服の色は黒であるので、17の「黒き衣着る覆面の人」や、99の「黒き蠟燭」と同じイメージ、すなわち怨霊でもある少女サダのイメージの表現であると思われる。

「とへど」は、作者が問うたけれども、という意味であらう。上の句は、怨霊である少女サダは、私が問いかけても物をいわない、ということになる。そして下の句の初稿は、「火中に投げぬ鮮血の指」という奇怪な表現であった。怨霊が、墓から噴き出す火の中に投げ込んだ「鮮血の指」は、誰の指であらうか。

「指」といえば、歌集『一握の砂』の第四首が、「指」という語を使った次の歌である。

いたく錆びしピストル出でぬ
砂山の

砂を指もて掘りてありしに

この歌は、少女サダの墓の土まんじゅうを素手で掘ったところ、だいぶ古くなった一片の骨が出てきた、という体験を回想したと思われる歌である。

骨を粗末にあつかうと体にさわりが来るといったたり話は、浜民に伝わっている。啄木は、墓を掘り、しかも一片の骨を直接いじった手や指への、たたりの出現をおそれていたのではないだろうか。「指」についてのこのような分析と関連づけければ、怨霊が「火中」に投げこんだ「指」は、作者啄木の指ということになる。

結局、この歌の初稿は次のように解釈される。少女サダの霊は、問いかけても物をいわず、私の指を切りとってしまつて、血に染まつたその指を、噴き出した火の中に投げこんでしまった、と。しかし、「鮮血の指」をそのままにしておくのは、啄木にとって怖ろしかったのであろう。「血紅の薔薇」と代えたが、やはり怨霊の懲罰のイメージは歌全体に含まれているので、全体を抹消したものと思

われる。

104 幼き日いたくも我は怖れにき聞くことなき叔父の片目を

この歌は、拙論「啄木の作歌動機の心理学的分析——『暇ナ時』などの恐怖の歌を中心に——」(岩手大学教育学部研究年報第三六巻 昭五二)で、かなりくわしく論じたものである。

浜民の秋浜三郎氏によれば、「片目」の「叔父」とは、「メッコオンチャ」と呼ばれていた一限失明の人のことであらう、ということであった。頭が禿げていて、体格のよい人だったそうである。また、同じく浜民の立花五郎氏によれば、「メッコオンチャ」と呼ばれていた人は、よく宝徳寺に出入りして、葬式がある時には造花をつくっていた人だが、神楽も上手で子どもたちによく教えていたという。しかし、顔つきがこわい上にどなりつけるので、子どもたちにはとてもこわがられた人であったという。

私は前記論文で、幼い啄木の墓掘り行為への罰について論じたが、この大量作歌の二十日前脱稿の小説「天鵲絨」におけるお八重のみた夢のうち、「お前はあのお姫様の代りにお墓に入るのだぞ」といわれたというのは、墓掘り行為をみつかつて、「お前はサダ子のかわりにお墓に入るのだぞ」といわれたこと、髪が延びて「眼を皿の様に大きくして、『これでもか?』と怒鳴った」のは、「メッコオンチャ」と呼ばれていた立花磯吉、と解釈した。

この「幼き日」の「片目」の「叔父」にかかわる恐怖の思い出の歌は、少女サダの墓を掘った体験と関連づけければ、非常によく解釈できるし、「喪服着し」の歌の次に作られた必然性も十分に理解できるのである。

森林の白き骨

105 その群にふと足袋一つ穿ける人あるを見出でて驚きてさる
(我は仕れの)

この歌も表面上は奇妙な歌である。作者はなぜ、「足袋一つ穿ける人」をみつめて「仆れ」たのであろうか。あるいは「驚きてさ」ったのであろうか。まず「足袋」の意味を探ることが必要である。

「足袋」という語を使った歌は、「暇ナ時」に見当たらないが、「小判ノト」には「かなしき事ある日に入れと大いなる足袋たまはりし神ゆめに見ぬ」(明41・9・29)という歌がある。「足袋」に深い意味が秘められているようである。

「暇ナ時」をながめると、「足袋」と同じく足に履くものである「沓」が使われている歌が、四首ある。しかも「炎天の下わが前を大いなる沓ただ一つ牛の如行く」(明41・6・25)、「裸足なる乞丐の爺に物こはれ一つの沓を泣きて与へぬ」(同上)というように、「沓」も一つなのである。

私は、60の歌「よと泣く君と破れし大沓と背負ひて我は隣国に通ぐ」の解説において、「沓」は埋葬の時に冥途の旅の履物として、死者と共に埋められるわらじのことであろうとみなし、啄木は墓を掘った時わらじを引っぱり出したのではなからうか、と述べた。

そこで「足袋」を、そのようなわらじとおきかえてみると、この歌「その群に」は、やはり非常によく理解できるのである。すなわち、「足袋一つ穿ける人」というのは、作者啄木にとって、かつて幼い時墓からわらじを引っぱり出してしまったために、冥途の旅をつづけることのできない亡者のイメージということになり、それをみて「驚きてさる」のは当然ということになる。やはり恐怖の歌なのである。

106 いと長き鼻と指なき手をもてるその老人に今日もあひにき

「いと長き鼻と指なき手をもてる」とは、実に奇怪な表現である。しかし「指なき手」は、三首前の「喪服着し女はとへど物いはず火中に投げぬ血紅の薔薇」の解説と関連づければ、容易に理解できる。

指で墓を掘り、骨をいじったために、怨霊によって指をもぎとられるのではないか、という恐怖にもとづく表現と考えられる。

「その老人」とは「老いたる我」、すなわち作者自身のことであり、「いと長き鼻」とは、指の欠如と対照させて奇怪さを誇張した表現であろう。

この歌の意味は、墓掘りの罪、骨をいじった罪によって、体が異常な状態になってしまった自己像を、今日も思い浮かべているということであろう。

107 わが女空ゆく鳥の影見つつたゞしはくんと膝に死ににき

女の死にゆくさまを詠んでいるので、これまでの連作歌と関連づければ、少女サダの死のイメージがあることはいうまでもなからうが、「膝に死ににき」は少女サダの死にかたではない。

82の歌の解説の際に引用した。啄木の小説断片には「……女が突然自分の膝に突付して、身を震はして直泣きに泣く。貴方は私を見捨てる気で言うときと斉って泣く。体も服装も、平生の通りお葉さんには違ひないが、其声がお葉さんの声でない。」という部分がある。

「お葉」は貞子、「其声」の主は亡き少女サダと解される文である。そこでこの歌は、自分の膝につぶして泣く貞子の姿から、死せる少女サダを想起していた時の心境を詠んだものと思われる。「鳥」はもちろん、とび去っていく死者の霊であろう。

108 何ものか鈍き音して泡立ちぬ秘して醸せる酒の面に

「酒」を文字通りの意味に解すると、なぜここで「酒」の歌が作られたのかが判らなくなる歌である。

この歌の真意を理解する鍵は、「音」と「夜」という語にあると思われる。「音」と「夜」といえば、七首前に「今日九月九日の夜の九時をうつ鐘を合図に何か事あれ」という歌が作られていた。火を噴

く墓の光景を秘めたと解される歌である。

「何ものか鈍き音して泡立ちぬ」は、墓の中から火が噴き上ってくるありさまのイメージで、結局この歌も火を噴く墓の光景を、酒の醸造過程における発酵にたとえた歌と思われる。

109 鉄壁を攀ちて漸く頂上に上れる時に日は暮れにけり

「日は暮れにけり」は前の歌の「(夜)」をひきついたのであろうが、「鉄壁を攀ち」るとはどういうことだろうか。

「壁」は、42の「限りなく高く築ける灰色の壁に面して我一人泣く」で使われたが、それは怨霊の象徴的表現と解された。43の「見よ君を屠る日は来ぬヒマラヤの第一峯に赤き旗立つ」は、「頂上に上れる」と共通性が感じられる歌である。

以上のことから、この歌は私には、怨霊のたたりをなんとか克服することができたが、時すでにおそく日は暮れてしまった、すなわち新しい文学の発展に大きな役割をはたす機会を逸してしまった、という意味に解されるのである。

110 いまだ人の足あとつかぬ森林に入りて見出でし白き骨共

この歌は、人があまり歩くことのない宝徳寺墓地の少女サダの墓から、白骨を掘り出した思い出を詠んだものであろう。「白き骨共」という表現は、白骨への無作法な態度を示しているので、怨霊への敵対心がこめられていた、といつてよいかもしれない。

111 大空の一片をとり試みに透せど中に星を見出でず

地上の「白骨」から一転して「大空」へ移った作歌であるが、四首前の「わが女空ゆく鳥の影見つ」が契機となったものであろう。

「大空の一片」とは、「鳥の影」、すなわち怨霊の幻影がみえるところで、啄木の上方恐怖の中心の場所であろう。「星」は、亡き少女

サダであろう。

この歌は、私をおびやかす怨霊の鳥のすみか、大空のあの場所をきりとつてすかしてみても、少女サダの星を見つけることはできないだろう、という意味と思われる。

211 七人の隠者一時に森を出て市に來ると城門を閉づ

「七人の隠者一時に森を出て」とは、これまで胸に秘めていた七人の女性のイメージを、一挙に「東海の」という歌として表現したこととの比喩と思われる。「市に來ると城門を閉づ」というのは、これらの女性のイメージを、いつまでも自分に密着させておきたい願望の表現と考えられる。

大木をゆるがして泣く鬼

113 (森の風 鋼鉄の色の真栗肌) 風や藍色の血にまみれたる鬼大木をゆるがして泣く

この歌の上には、「鬼」と一字記されている。これは、次に引用する森林太郎宛書簡と日記をみると、観潮楼歌会の兼題五つのうちの一つであったことがわかる。

「(略) 六日の夕、二週間振にて千駄ヶ谷にまゐり、芊々たる夏草に目を驚かし候ひしが、其夜の御清会の事は翌日平野君吉井君より具さに承り候ひし、御知らせ下され候ふ兼題のうち、筋、鬼、二首宛には今から閉口罷在候、(略) (明41・6・9 本郷より 森林太郎宛書簡)

「(略) 今日森先生の観潮楼歌会である。北原君が来てゐた。やがて伊藤左千夫翁も来た。兼題五首づつ二度、(人妻、戸、鬼、跳る、筋) 予のは(略) (日記 明41・7・4)

この歌の初稿は「森の風」ではじまっているので、前の歌の「森」

をひきついで作りはじめたものと思われる。「森」は宝徳寺墓地のイメージとつながっているであろうし、「風」は前にのべたように、怨霊出現の予兆と解される語である。

「鋼鉄の色」の全くの「素肌の鬼」というのは、秘めていた思いを次々に吐き出し、素裸のようになってしまった、作者自身のイメージであろう。「大木」は、これまでの「大」の意味の探究結果からみて、怨霊の象徴的表現と解される。

上の句は「風や藍色の血にまみれたる」と書きなおされたが、「血にまみれたる」は、108の「喪服着し女はとへど物いはず火中に投げぬ白紅の薔薇」との関連を考えれば、怨霊によって指をもぎとられ、血まみれになっているイメージであろう。血を「藍色」としたのは、すでに使った「紅」とことなる表現を求めたことと、凄絶さを強調したかったためと思われる。「風」も、すさまじさの強調であろう。

以上の分析結果を総合すれば、この歌は、怨霊出現を思わせるすさまじい風の中で、墓掘りと骨いじりの罪のために指をもぎとられた自分は、動かすことのできない大木をゆさぶるように、少女サダの霊に向かって泣くばかり、ということになる。

114 すさまじく山なりどよみ既にして一葉落つる音だにもせず (家)

ついに、家鳴り震動が生じたと思われるほどの妖気に圧倒されたが、その直後は全く静寂になった、という意味の歌であろう。しかし、「家」を「山」となおしているの、墓からの火の噴出の直後、葉一枚落ちてその音が聞こえるくらいの静寂さになった体験も、基底にあったのであろう。

115 ただ一歩われあやまりて遅れたる為(半生)に生涯勝つことを得ず (われ半歩ただに半歩をあやまりて)

ほんのちよつと遅れたために、ついに一生涯人に勝つことができ

なくなってしまうた、という悔恨の歌である。その「遅れた」というのは、どんな状況だったのであろうか。

「勝つ」ということばが、それを推理する手がかりとなりそうである。この頃の啄木の志は大小説家になることだったので、「勝つ」はその志を達成することであろう。そうすると、「遅れた」というのは、小説を書けなくなった原因もしくは契機であるので、五月二十四日朝貞子に訪問され、身をかわすのが遅れて、性関係に入ってしまった時のことと思われる。

116 (我君に罪えて入れる牢獄の戸にぞ見いでぬあはれ君が名) (壁に誰が手か君が名を読む)

明瞭に「君」への罪悪感を詠んだ歌である。「あはれ」な「君」は、死せる少女サダであり、「罪」は墓掘りの罪および骨いじりの罪であろう。

この歌の上には、「戸」という小文字が記されている。「戸」も、観潮楼歌会の兼題の一つである。初稿の「牢獄の壁」を「牢獄の戸」となおしたのは、「壁」から兼題の「戸」を連想し、兼題の語を使うという動機がはたらいたためと思われる。

折角推敲されたのに、この歌全体が抹消されたのはなぜだろうか。「あはれ君が名」と悲哀感を表現したものの、反動的に怨霊への敵対心がわき起こって、少女の霊への肯定的表現を否定したくなったのであろうか。

117 夏の風入れむとあけし胸の戸ゆつと君入りて出でむとせず

この歌の上部にも、「戸」という小文字が付記されている。この歌は、はじめから「戸」という語を使おうという意図で、作られたものであろう。

一見したところでは、暑いので夏の風を体にあてようと、胸のところをはだけたら、そこに女が手を入れてしまつて出そうとしな

い、と解釈したくなる。女は貞子が浮かんでくる。

しかし「君入りて」であって「君手を入れて」ではないし、「風」は、この日のこれまでの作歌では、単なる風とは思われないのである。

怨霊出現の前兆である無気味な風が吹いてきたので、覚悟をきめて胸をはだけ、胸の中に秘めていたことを次々に歌に表現したが、少女サダの霊はすばやく自分の胸の中に入り込んでしまつて、出ていこうとせず、私の心から離れなくなつてしまつた、という歌と私には思われる。

118 茫然として見送りぬ天上をゆく一列の白き鳥かげ(裳の影)

「白き裳の影」を「白き鳥かげ」となおしているのが、「鳥」が白い死装束の亡霊のイメージの象徴であることが、はっきり裏づけられる歌である。

七首前で「大空の一片」と表現したが、ある方向の空に次々にみえた、白い死装束の亡霊の幻影のことを詠んだのであろう。「天上をゆく一列の白き裳の影」では、幻影であることが余りにもはっきりしてしまうので、「裳の影」を「鳥かげ」という象徴的表現にし、かくしたものと思われる。

119 (床の間と文机火鉢いろいろの城壁きづき君を防ぎぬ)

「君」を怖れ、「君」が近づかぬよう防いだというのである。貞子の背後に怨霊を感じるので、あるいは貞子が怨霊の化身とも思えるので、啄木はすっかりおびえてしまい、捨てられまいとして迫ってくる貞子につかまるまいとして、部屋の中を逃げまわつたことがあったのであろう。

この歌の上には「跳」という字が付記されている。やはり観潮楼歌会の兼題の一つである。兼題を使う意図で作った歌であらう。

「わが病める心」は怨霊恐怖に陥っている心であり、その「駒」が「黒髪の鞭をおそれて跳らむとする」というのは、貞子の性的誘惑にに応じてしまいそうになる状態と思われる。

121 杳然と黄昏れて来ぬその時につと我離る君は人妻ようぜん

この歌の上には、「人妻」と付記されているが、これも観潮楼歌会の兼題である。兼題を使うために、「君は人妻」としたものと考えられる。

「杳然」というのは、はるかに遠いさまである。はるかに遠い方から黄昏れてくるのがわかると、性的誘惑にのらないように、私はすばやく君から離れたものだ、というのであろう。「君」はもちろん貞子であらう。

122 うす紅き煙あがり夜夜空遠き都の地平の上に

この歌については、拙論「啄木短歌における『煙』と『火』」(啄木研究第三号 洋洋社)で、次のように述べた。

「同じ日の作歌には、墓からの火の噴出を、『赤き百合咲く』と表現したとみなされる歌がある。『うす紅き煙』の背後には、やはり同じイメージが秘められていた疑いが濃厚である。『遠き都』と詠んだが、この作歌の場所は東京であるので、故郷を『都』とおき代えたのであろう。『地平』という語は、宝徳寺墓地の象徴的表現と解される、『はてななき曠野』と通ずる表現である。」

しかし、この歌の直前に作られた「杳然と」、その前の「わが病める」、さらにその前の「床の間」という三首はすべて、貞子のイメージが秘められてっていると解されたし、この歌の次に作られた歌も、後述するように、明瞭に貞子のことを詠んだとみなされるの

で、私の前記の解釈は訂正しなければならないと思う。

しかも、貞子の熱情的な接近を示唆している五月十六日と十七日の日記には、「都」と「火」という語が使われている。この歌は「うす紅き煙」ではじまるが、「煙」の源は「火」である。次に兩日の日記から抜萃して、引用しよう。

「てい子さんから長い長い手紙。／百千万の物の響が渦を巻いて居る大都の中に美しい火が一つパツと燃えて、其火が近いて来る、近いて来る……近いてくる。」

(略)

男と女は、結婚しない方が可いぢやないかなどと考へて宿に帰る。色々頭が迷つて居た。神経痛であらうか、左の胸が痛い。四辺がすっかり暗くなるまで、洋燈つける事も忘れて、椅子に凭れて居た。轟々たる都の響の只中から、幻が唯一つ花の様に湧いて、近づいて来る、近づいて来る。」(日記 明41・5・16)

「朝飯と昼飯と一緒に食つて、出懸ける。雨の都の電車、日曜ながら人が少なくて、何となく詫しい様な心地がする。色々な事を胸に描いて、中橋広小路で降りる。一町許り左に折れて右に這入つた小路が太鋸町三番地、四年前に見覚えのある門札には行書で「植木千子」と書いてあつた。

お母さんな人が飛び立つ程喜んで迎へてくれた。(略)

すしを御馳走になつて三時十分前に辞す。小路を出ると後から我名を呼ぶ声、それは贈物を包んだ風呂敷を持つて、追かけて来た貞子さんであつた。

(略)

千駄ヶ谷の歌会であつた。平出君川上君茅野君は昔に變つて居ない。松原君中嶋君、恒川君田口君大貫君東条君其他、主人夫妻を合せて十七人。題は応、未、虚、趣、組の五字。(略) 自分のから二首、

火の如き少女つと出づ虚なる都の響き轟たる中ゆ。

手に手をととりふと他を思ふ東の間に一人死ぬべき末期を怖る」(日記 明41・5・17)

これらの資料も加えて検討してみると、「うす紅き煙あがれり」は、「火の如き少女」すなわち貞子のイメージが薄れていくさま、「遠き都の地平の中に」は、彼女との距離が遠くなったことを秘めた表現、と考える方が妥当と思われる。

123 とみてわが馬は跳れり千人の少女の環よりつと君の出づ

この歌にも、観潮楼歌会の兼題の一つ「跳」が使われている。この字を使った三首前の歌、「わが病める心の駒も黒髪を鞭をおそれて跳らむとする」をひきついでた歌であらう。

「わが馬」は「わが病める心の駒」と同じで、心の中の獸性すなわち性的衝動を意味しているのであらう。「つと君の出づ」は前述の「火の如き少女つと出づ」と同じく、貞子が急速に接近してきたことと思われる。

結局この歌は、前首で貞子との別れを表現したことから、逆に貞子との再会の時の心境を想起して詠んだものであらう。

124 われ額に太き筋たていぎたなく君を罵るまで(とみてゆめさむ)に愛せり

拒否的態度を示してもなおまつわりつく貞子に対して、きたない言葉でののしる場面の夢を、まず詠んだものであらう。末尾を「までに愛せり」となおしたのは、再会の時の心境を想起していたので、貞子への肯定的感情が少しよみがえったことを表現したのではなからうか。「筋」は兼題の一つである。

125 寥々(とらとら)と百千万の軍鼓(みな)まづ鳴れり我まだ命を下さず

何ものかを撃退するために行動を起こす段階に達したが、まだ最終的決定をしていない、ということを示唆している歌と思われる。撃退の対象は貞子であらう。

「うす紅き煙」という歌を詠んだり、「つと君の出づ」と表現したばかりでもあり、「我まだ命を下さず」は貞子への未練を秘めた表現と解される。

126 (白馬にまたがりてゆく赤鬼の騎兵士官も恋せしあはれ)

「馬」は三首前、「鬼」は十三首前に使われたばかりの語である。「馬」は三首前では「わが馬」であり、作者自身の性的衝動の象徴と解してきたが、この歌では「白馬にまたがりて」なので、それは作者自身ではなく、「赤鬼の騎兵士官」が作者自身を意味していたと思われる。鬼を「赤鬼」としたのは、「白馬」との対比であるとともに、血にまみれている自己像の表現でもあったのではなかろうか。

「騎兵士官」は、前の歌で「百千万の軍鼓」と表現した、軍隊のイメージから発したものであろう。「白馬にまたがりてゆく」「騎兵士官」は、一つには白馬にまたがるナポレオンのイメージにもとづくのであらうが、これまでの作歌の探究結果との関連で考えると、色の白い貞子との性関係を秘めた表現、と解することができる。そして「騎兵士官も恋せしあはれ」と結んでいるので、貞子への未練を秘めながら、自己憐憫を詠んだのであろう。

しかし、改行されて二行になっているこの歌の上部、「白馬にまたがりて」と「官も恋せしあはれ」のあたりが線でかこまれ、「恋せし」というところを中心にして、X印がつけられている。これは歌全部の抹消を意味したことはあろうが、抹消のしかたからみて心理的には露骨な性の表現を抑制したくなったためと、貞子への恋の未練を否定したくなったためであらう。

二十三―四日の連作過程の総合的考察

六月二十三―四日の連作は、前記の「白馬に」の歌で終わって

いる。二十三日夜、枕についてから作りはじめた「石一つ」の歌から、この「白馬に」の歌に至るまでの一―三首の連作歌を、逐次的に分析し解説を試みてきたのであるが、ここで一応解説結果を総合しておいた上で、先に進みたい。

一、表現技法上の特徴

(1) 隠喩とみなせる表現が非常に多い。

これには「石」「砂」「山」「鳥」など、他の作品においてもしばしば使われていて、しかも幼少期の情緒の体験に根ざしていると思われるものと、「犬」「黒麵^{くろめん}」「菓草」「蟹」「豹」「蜘蛛」「老木の櫛」「鉄槌」「牛」「蠟燭」「隠者」「鬼」「馬」など、一時的に使われたものがある。

(2) 数詞が非常に多い。

もっとも多く使われた数詞は「一」で、抹消されたものを含めると三―一回も使われているが、そのほかでは「億兆」「百千万」「百万」「万」「千」「百」など、巨大な数の数詞が使われている。

それら以外で目立つのは、五回使われた「七」という数詞である。

(3) 誇張的表現が非常に多い。

巨大な数の数詞も誇張的表現であらうが、「大盃」「大香炉」「大海」「大版」「大心力」「大鉄管」「大山」など、「大」も非常に多く使われている。

さらに、「北極」「ヒマラヤ」など極地の名や、「世界の開発の第一日」「はてもなき曠野」「空半ば雲に聳れる大山」「限りなく高く築ける灰色の壁」など、極度の誇張的表現も数多い。

(4) 作者自身を多様な語で表現している。

作者自身について、「我」という普通の表現のほかに、多様な語で表現している。

「病犬のごと」「我が雲雀」「わが馬」などは、明らかに作者自身の比喩といえるものである。「病鳥」「老木の櫛」「艦装終れる船」「鬼」などは、作者自身の隠喩と解される。

さらに、「わが胸の底の底にて誰ぞ一人」「悄然として前に行く我」というように、自己像を作者の深い内部または外部に定位した作歌もあるし、「わが友」「わが父」「その老人」というように、別の人物として表現したと解されるものもある。

(5) 打消しの語が非常に多い。

打消しの語が多いのが目立つが、とくに、「去りえず」の「ず」のような、打消しの助動詞「ず」が多く、三三回使われている。

(6) 歌会の兼題の語を使っている。

観潮楼歌会の兼題である、「人妻」「戸」「鬼」「跳る」「筋」という語を使った歌が作られている。計八首である。

二、感情表現の特徴

明らかに感情を意味している語だけについていえば、もっとも多いのは「涙」「泣く」「かなし」「あはれ」など、悲哀感を示す語であり、次いで「睨まへぬ」「殺す」「爆弾を投ぐ」「撃つ」など、攻撃的感情を示す語が多い。恐怖、自嘲の語も多い。

各首の解釈の結果からみれば、もっとも多いのは恐怖である。

三、内容分析の結果の総合

この一一三首の大量作歌をつらぬいていた作者啄木の心的内容は、幼き日の墓掘り行為にもとづく少女サダの霊のたたりへの恐怖、たたる怨霊を抹殺したい願望、少女サダとの死別の悲しみ、たたり恐怖の激しい再発の契機となった貞子への攻撃的な感情、このような心理的危機において想起されたつかしい女性たちのイメージ、怨霊恐怖により創作できなくなったこと

による激しい葛藤と自己分裂、貞子の誘惑に陥ってしまった自分への嘲りが、主なものであったと考えられる。

(一九七九年七月六日受理)